

氏名(国籍)	廬 ^{ろう} 仙 ^{せん} 淑 ^{すく} (韓国)
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	博甲第1,614号
学位授与年月日	平成9年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	『和泉式部集』研究
主査	筑波大学教授 桑原博史
副査	筑波大学教授 犬井善壽
副査	筑波大学教授 芳賀紀雄
副査	筑波大学教授 田沼睦
副査	筑波大学助教授 中村俊也

論文の内容の要旨

和歌という文芸ジャンルは、日本文学史上の最初から近現代に至るまで、唯一存在しつづけてきた表現である。各時代に個性ある歌人が出現しているが、その中でいわゆる平安時代は、数多くの女流歌人が輩出した時期として、広く認識されているところである。その女流歌人の多くは、日常のたしなみとして和歌を詠む生活を経験したのだが、そういう私的世界と屏風歌・歌会などの公的世界と、両面にわたって活躍した一人が、和泉式部である。しかも彼女の残した歌数は、二千首にもおよぼうとする多量のものであって、歌人としての知名度にくらべ、その研究は今後に俟つところが大い。

その中で本論文は、『和泉式部集』の和泉式部の歌を読みとくしながら、彼女の和歌の特質を明らかにし、彼女を中心に平安時代の女流歌人そのものの特質の一つを文学史的に明らかにしようとするものである。

論文の構成は、次の通りである。

序章

第一章 歌群別に見た「かたらふ」の用例の分布とその意味

第二章 「かたらふ」に対する「物思ふ」世界

第三章 和泉式部の「かたらふ」姿勢の生成と師宮との関わり

第四章 終章—平安女流私家集における『和泉式部集』の位置

全章のまとめ—『和泉式部集』の特色

序章では、他撰である『和泉式部集』の本文、ことに詞書を彼女の状況・心理を解明する資料として扱う上で、どこまで信用できるかを吟味した。その結果として、歌集全体としては他撰であるが、歌集はいくつかの歌群からなりたっており、それぞれの歌群は和泉式部自撰の可能性が高いことを指摘した。指摘の多くは、すでに同様の指摘がなされている所ではあるが、諸説のある歌群については新たに吟味し結論を述べたものである。しかも、歌群よりもっと小単位の連作や群作において、式部自身の手になる詞書が付せられていて、その連作や群作を他人が機械的に歌群としてまとめ、歌群の集成として歌集にまとめたものであることも、十分に吟味した。

次に第一章は、序章で得られた結論に基づいて、歌集の詞書と歌とに頻出する「語らふ」という語に注目した。第一に、「語らふ」の用例の、歌群に応じた分布状況、第二に、「語らふ」対象とする人物の多様さと表現の複雑

さを調査した。その結果「語らふ」対象の人物は、主として恋人であるが、「ただに語らふ男」「語らふ女ともだち」など、同時代の他の女流歌人の集ではきわめて少ない表現であることも、はっきりした。つまり、つぎつぎに恋に落ち恋人を求めつづけた彼女には、肉体的な問題を離れて、いつまでも心変らぬ友人を異性同性に求めたという精神状況があったのである。

絶えず相手を意識し他者を求める「語らふ」姿勢と、まったく相反する姿勢が、独り「物思ふ」姿勢である。第二章は、この「物思ふ」の用例七五例について、「語らふ」と同じように、さまざまな観点から考察した。その結果として、たとえば師宮の死を悼む挽歌群に一四例もの多くの「物思ふ（または「物思ひ）」の語が集中していること、「物思ふ」の語が集中している連作歌では「語らふ」の語が少ないという相関関係があることなどを指摘した。

第三章は、それまでの論の結果として、『和泉式部集』において、一見、相矛盾するかのような「語らふ」「物思ふ」の二つの語のからみ合いを、彼女の人生において決定的な意味を持つ師宮との関係から、全面的に検討した。幼い時から「物思ふ」資質を持っていた彼女が、弾正の宮との恋その他の経験から、いっそうその思いを深くしていた。そういう時、師宮から「語らふ」ことによって「物思ふ」心が慰められると教えられ、逢瀬を重ねてこの世に「同じ心」の持ち主がいることを知った。

その慰めが、宮の死によって失われ、再び自分を「物思ふ」人と認識することになる。

その経緯を、歌集の中の七五例におよぶ「物思ふ」語の、歌群における分布状況、「語らふ」との相関関係などを考察することによって、明らかにしようとしたのである。

第四章は、『和泉式部集』以外の平安女流私家集における「語らふ」と「物思ふ」の使用状況とその内実を調査し、『和泉式部集』の特質を明らかにしようとした。対象とする女流私家集は、平安時代初期から中期まで、およそ20人の歌集である。それらと『和泉式部集』と、両語を比較すると、数量の上で圧倒的に『和泉式部集』の使用度が高い。のみならず、その質の面でも多様さ深さが群を抜いている。そのことから、和泉式部の文学史上の歌人としての特性・個性は、特筆すべきものと認定したのである。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、平安女流私家集中の最大歌数を持つ『和泉式部集』について、その特質を「語らふ」「物思ふ」という二つの語を分析することによって、明らかにしようとしたものである。

作品を考える上でその作品の特質を示す語は、さまざまであろうが、和泉式部という人の人生を考える時、人間関係あるいは人間との触れ合いが彼女にとって大切であったろうことは、容易に想像できる。そして、人に対して自分との共通項を見だし親しみを持つ「語らふ」と、共通項を見いだせず孤独に苦しむ「物思ふ」とは、一見、対立する心情に結びつくものであるから、その二語を取り上げて和泉式部とその作品—和歌—toに迫ることは、一つの有効な研究方法であろう。

この二語については、それぞれ先行する論文が幾つかある。しかし本論文のように、徹底して個別の用例を検討することはなかったし、まして両語に相関関係のあることに触れる論文は、まったくなかった。その点は、高く評価される。

さらにまた、その両語の使用数・使用比率は、他の平安女流私家集の中で群を抜いていること、数が少ないため断片的にしか分からない平安女流私家集の作者たちや歌人たちが、女性として時代の中で苦しんでいる状況を、逆に『和泉式部集』と和泉式部のあり方から照らし出すことができるなど、第四章は、文学史上の『和泉式部集』を考える手がかりにまで、研究をおよぼしている。

論の最初において、『和泉式部集』の成立や内容構成を考えるのに、先行する諸論文に強く引きつけられていること、実証を旨としながら和泉式部という女性にどうかすると肩入れしすぎて、自己の文学観を時々述べてし

まうことなど、小さな欠点はある。しかし、細かな論述を積み重ねて大きな『和泉式部集』の把握に至った本論文は、まったく新しい成果を示しており、博士論文として高い水準を示すものと評価する。

よって、著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。